

聖書日課『からし種』 2026.7.26—8.2

7月26日 (日) サムエル記下 2章	「アブネルはヨアブに呼びかけて言った。『いつまで剣の餌食とし合うのか。悲惨な結末になることを知らぬわけではあるまい』」(26節)。「将軍」と呼ばれる人たちがいる。彼らは常に「戦いで勝利すること」が求められたが、同時に「剣による戦いの空しさと悲惨な結末」を知っていた人たちであった。世界の「将軍」たちに、今日、戦いを止める勇気が与えられるように。
27日 (月) サムエル記下 3章	「王はアブネルを悼む歌を詠んだ。『愚かな者が死ぬように、アブネルは死なねばならなかったのか』」(33節)。戦国の世においては勇猛さを称えられた「将軍」もあつげなく土に還っていく。創世記のアベルの時から神は、無念の死を遂げた者の血の叫びを聞き続けておられる。神の答えとして来てくださった「平和の主」の福音が世界中で分かち合われるように。
28日 (火) サムエル記下 4章	「サウルの子ヨナタンには両足の萎えた息子がいた。…彼の名はメフィボシェトといった」(4節)。サウル家とダビデ家の抗争が続く中、ヨナタンの息子メフィボシェトの消息がわずか五行で語られている。戦乱の中で皆が疑心暗鬼になり、味方も疑い合い、裏切りの血が流されていく中、ヨナタンとダビデの信仰的友情の確かさを私たちに思い起こさせるように。
29日 (水) サムエル記下 5章	「イスラエルの長老たちは全員、ヘブロン王のもとに来了。…長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした」(3節)。サウルと息子たちの亡き後、長老たちは自分たちでダビデに油を注いで王とした。「主の名」が呼ばれているが、そこには「人の思い」が色濃くにじみ出ている。「人の思い」と「主の思い」の狭間で、繰り返し聖書に聴く信仰が問われている。

メール配信登録メール senfkorn.obc@gmail.com

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2026.7.26—8.2

30日 (木) サムエル記下 6章	「主の御前でダビデは力のかぎり躍った」(14節)。全長老たちの信任を得たと言っても、「人の思い」は簡単に変わることをダビデは知っていた。要害エルサレムを手に入れて王宮を建て、「神の箱」を運び入れることでダビデは「神の思い」を人びとに示そうとする。主の御前で力の限り躍る姿は「主の助けなし」に何もできないことを知るダビデの告白だったのだろう。
31日 (金) サムエル記下 7章	「主なる神よ、あなたの御言葉は真実です」(28節)。「神の箱」を都に運び入れて王権を確立したダビデに、預言者ナタンは、その子孫の王国を「とこしえに固く据える」神の祝福を語る。ただし「彼が過ちを犯すときは、人間の杖をもって彼を懲らしめる」という警告も同時に語り聞かせた。豊かな祝福に込められた「責任への招き」を聴き取る信仰をいただきたい。
8月1日 (土) サムエル記下 8章	「主はダビデに、行く先々で勝利を与えられた」(14節)。ダビデを王として立て、その王権を揺るぎないものとしたのは主なる神である。ダビデは行く先々で勝利を与えられ「向かうところ敵なし」の日々にあって、しかしその王権崩壊の種火が生まれていた。人の目に「よし」と映るもののなかに「罪」が潜んでいる。主なる神の前にへりくだる謙遜を今日いただいて。
2日 (日) サムエル記下 9章	「ダビデは言った。『サウル家の者がまだ生き残っているならば、ヨナタンのために、その者に忠実を尽くしたい』」(1節)。ダビデとヨナタンは、互いに深く愛し合い、主に契約を結んで(サムエル記上 18・20)いた。ヨナタンが示した深い友情に対して、ダビデもその死を嘆き、彼に忠実に尽くすため、ヨナタンの息子メフィボシエトを王子のようにその食卓に招いた。